

《最優秀賞》ふくしま未来農業協同組合

●『花育授業』の推進 ～震災で傷ついた心の癒しを出発点に～

平成23年3月、東日本大震災が発生しました。その後、福島第一原子力発電所の放射能漏れによる福島県産農産物に対する風評被害が起きました。このため、当時JA新ふくしまが管内で行っていた農業体験を実施することが難しくなっていました。そこで震災で傷ついた心のケアも含め“花にふれること”で癒しの時間を共有できるように、同年に㈱福島花きと共同で花育授業を、管内の小学校1校6名でスタートしました。

その取り組みは平成28年JAふくしま未来合併後にも引き継がれ、令和3年度は管内の小学校114校中87校の総勢3,457名で実施しました。

花育授業では約2時間をつかい、いけばなの講師より指導を受けながら生徒達が実際に花を生ける体験をします。同時に「いけばなの歴史」や「季節の行事」など、日常での花を生ける風習や習慣を学んでもらいます。また、花育授業ではJA管内で栽培された花をつかうとともに、管内の花も紹介しています。

普段あまり花にふれることが少ない生活のなか、花育授業を受けることで生徒のみならず先生達も自分で花を扱い、改めて花への興味を感じてもらえるので、この授業の役割はとても意義のあることだと考えています。

いけばなでは地域で栽培された生花をつかうことで命の大切さを学べると同時に、花や緑に触れることで心を癒し、ひいては地域の農業の重要性やJAの存在意義などの理解醸成を促すことができる文化活動です。

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症が未だ蔓延しているなかで、花育授業の活動にも感染症対策の工夫をしました。そのひとつが、JAふくしま未来が運営するYouTube「みらいろチャンネル」です。いけばなの実技を動画で配信し、対面ではなくオンラインで花育活動を継続しています。「いけばなの歴史」「花の生け方」「JAの話」などのコンテンツでJAが動画を作成しました。

また、少人数でも開催できる安全な方法を模索しながら花育授業を続けています。

教育分野において、少子高齢化による生徒数の減少や学校の統廃合などという問題が多く存在しています。しかし、令和4年度以降も、地域に根差したJAとして、花育授業が途絶えることの無いようさらに取り組みを継続し、JAふくしま未来管内の全小学校がこの花育授業を体験できるように普及させていこうと考えています。



ふくしま未来農業協同組合
数又清市代表理事組合長



《優秀賞》大北農業協同組合

●セカンドスクールと心の交流会 ～東京の中学校と白馬の農家民宿～

長野県白馬村を管轄するJA大北では、東京都にある武蔵野市立の中学校3校と“セカンドスクール”という交流を平成15年度から継続して実施しています。セカンドスクールとは、授業の一部として自然に恵まれた農山漁村に長期間滞在して、普段の学校生活（ファーストスクール）では体験・学ぶことの出来ない「総合的な体験学習活動」をカリキュラムとしている教育スタイルです。

平成15年以降、20年近くセカンドスクールの交流を続けてきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で令和2年度からは受け入れを中止せざるを得なくなりました。

そんな中でも、交流を継続するための方法を模索し、令和3年度に武蔵野市立中学校・農家民宿・JAの3者で検討を重ね、「緑をつなぎ、人をつなぎ、未来へつなぐ」をテーマにオンラインでの『心の交流会』を実施することができました。

オンラインでの心の交流会は、生徒側が受入予定であった民宿に「白馬はどのようなところなのか」「そこで育てている農作物について」等の質問を行い、農家民宿側がそれに答えるという形になりました。

また、武蔵野市立の別の中学校では、JA大北からは、管内で採れた収穫物を送り、生徒がその食材を自宅に持ち帰って家族で調理して食べてもらいました。一方、学校からは、JA大北へ料理写真や感想を送ることで、食農教育の交流を行っています。このように、それぞれの学校と話し合いを重ねながら、今できる交流のありかたでセカンドスクールの交流体験を継続しています。

生徒と農家民宿が交流することによって、生徒側は農業生産者への理解を深め、食育につながると同時に、協調性・思いやりといった心を醸成し、社会性の成長も期待できます。受け入れる農家民宿側は、純粋な若者の感性に触れることによる精神的な刺激や生産へのモチベーションが活発化されています。

さらには農家民宿同士のコミュニティ機能の活性化にも繋がると考えており、今後も積極的に世代を超えた都市農村交流の活動を継続していく所存です。



大北農業協同組合
武井宏文代表理事組合長

